

令和7年度

文学部第3年次編入学者選抜学力試験問題

現代国語

注 意

1. 解答は、別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 総ページ数 — 11ページ
問題ページ — 第2～第6ページ、第8～第11ページ
(第1ページ、第7ページは白紙)
3. 試験終了後、この冊子は持ち帰ること。

I つぎの文章を読んで後の問に答えよ。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

(山本圭『嫉妬論 民主社会に渦巻く情念を解剖する』による)

問一 傍線部A～Eのカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部1「嫉妬は疲れを知らない」とはどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部2「嫉妬は現代社会において、ますます苛烈なものになっている」とあるが、それはどうしてか、「休暇嫉妬」を例として説明せよ。

問四 傍線部3「社会にとっても無視しえないネガティブな効果」とはどのようなものか、マララ・ユスフザイ氏の場合を例として具体的に説明せよ。

問五 傍線部4について、「犯人」とあるが、この語が引用符を用いて示されているのはどうしてか、説明せよ。

問六 波線部「嫉妬がもたらす認知の歪み」とはどのようなものか、文章全体を踏まえて説明せよ。

(このページは白紙です。)

II つぎの文章を読んで後の問に答えよ。

河野の失恋は、その腐ったような尾を、何時迄も、引いて居た。そして、その尾は何時の間に、放恣な出鱈目な、無検束な生活に変わって居るのであった。彼の生活の何処にも、手答えがなかった。性格から、凡ての堅い骨を抜き取ってしまったように何事をするにも強い意志がないように見えた。そして、おしまいには、今迄の親友の群を放れて、何時の間にか、遊蕩生活をさえ始めて居た。そして、自分に対する友人たちの尊敬や信頼を、自分で塗り潰して居た。

その頃の雄吉は、細木や藤田などに逢うと、定まって河野に対する悪口を云って居た。細木などと、久し振に会って、三時間も四時間も、立てつづけに喋った後で、総勘定をして見ると、会話の三分の二までが、河野の過去や現在のだらしのない行為や生活に対する非難で持ち切つて居た。失恋当時の弱々しい未練たつぷりの態度や、それにつづいての妄動や、現在の彼の生活の頹廢して居ることを、掛合で喋べつて居るのであった。それに気が付くと、雄吉は淋しかった。親しい友人の悪口を、蔭でさんさんに云い合う。その事自身が、可なりいやしい厭わしい事に違ひなかった。が、会話の途中で、ついその事に気が付いて、

「ああそうそう。又河野の悪口を云って居た。」

と、お互に制し合う場合には、きっとその後の話には、一時に沢山の禁句が出来たように、妙な窮屈さを感じた。そして、何時の間にか話が河野の悪口に、後戻りして居るほど、雄吉たちは、河野の生活に対する非難で、心が一杯につまって居た。

雄吉は思った。我々の親しい友達の間では、今迄蔭口などは、決して利いた事はなかったのに、河野に対してのみは、皆が平気で少しも良心の苛責を受けずに、いくらでも悪口を話し続け得るほど、河野は友達に対する威厳を無くしてしまったのだと。友人に対する威厳や、友人からの信頼を、無くしてしまう事、それは無くする当人から云つても無くされる友達から云つても、可なりの悲劇に違ひないと思つた。

殊に、雄吉は細木などから、

「何うだ。やつぱり、君が新聞小説なんかを、書かせるからいけないのだ。河野を貧乏にして置いたら今頃は困つて居るにしても、健全

に、清浄な生活を送つて居るぜ。」などと云われる度にくすぐったいような不快を感じた。河野が失恋に苦しむと同時に物質生活の不安に脅かされて居る時、多くの友人の抗議を排して、新聞小説を書かせたのは、雄吉であった。河野が、細木や吉岡などの烈しい反対に逢つて、到頭書かないことを決心して、断りの返事を、雄吉の所へ持つて来たとき、敢然として再考を求めたのは雄吉であった。

河野と同じように、無資産の貧乏人である雄吉は、細木や吉岡などよりも、河野の心持はよく判つた。失恋と同時に、凡てに元気を失つた彼には、貧乏人には付物である物質上の不安が、何時よりも猛烈に、感ぜられて居たのだ。その不安を取り去ることは、失恋に対する対症法ではなくとも、彼の心持を、少しでも軽くする事に依つて、間接に幾何かは、彼の苦悩を癒するものと信じて居た。雄吉のそうした考も、一時は誤つて居ないように見えた。

『僕は、新聞小説をかけた事に依つて、やや救われたと云つても、いい位だ、あの頃の友達の忠告の中では、君のが一番適切だった。』と、河野は後になってから、雄吉に感謝の意を洩したこともある。それに対して、雄吉も内心多少の得意は感じて居た。それなのに、河野の生活が、此頃のように放埒になつてからは、宛もその原因が、新聞小説をかけた為に得た比較的豊かな、物質上の自由にあるように解釈されて、従つてそれを書く事を勧めた雄吉迄が、細木などから軽い非難的になつて居た。その事も、雄吉としては、快い事ではなかった。

その上、その頃は雄吉の知人で、同時に河野を知つて居る誰かに逢うと、その人はきつと河野に対する報告を、聞かせて呉れた。丁度、子供が何かの悪戯をしたのを、それを監督する責任のある父兄に、告口でもするように。

「君！ 河野君が此間の晩にね……」とか、

「君が、まだ知らないとは駭いたね。」と云うような冒頭で、河野がああしたと云つたような事を、いくらか誇張したように、話して呉れた。どの話を聴いても、河野は決していい役廻りをして居なかった。河野が人が好くて、気の弱いのに付け込まれて、散々に利用されて居て、しかも蔭では、馬鹿にされて居ると云つたように結論せられる話ばかりであった。そして彼等はきつとおしまいに、「君達から、少し忠告するといいいんだ。」と、親切にかしに、付け加えて呉れるのであった。

雄吉も、細木や藤田などの極く親しい間丈では、河野に対する非難を、いくら繰り返しても、そう不快ではなかったが、余り自分たち

と、親しくない者から、彼に対する非難や侮蔑^{あへん}を聞くと、やっぱり不愉快であった。もっと、何うかして呉れればいいと、思わずには居られなかった。もっと、シヤンとして呉れればと、思わずには居られなかった。

河野は、生活の調子を、ダラシなくしたばかりでなく、創作の方面でも、同人雑誌をやつて居た頃の向上的な理想などを、悉く振り捨ててしまつて、婦人雑誌の中でも一番下品な雑誌へ、続き物を書く約束などを始めて居た。藤田などは、それを知ると目を丸くして、駭きかつ慨いた。

「僕は、河野が放蕩を始めたからと云つて、それを彼是^{かれこれ}云おうとは思わない。いくら、遊蕩をしてもいいが、創作の方面でもっと真剣であつて呉れば文句はないのだ。また創作の方面を投げやりにするのなら、もっと実生活の方でシツカリした真面目な生活を送つて呉ればいいんだ。河野は、生活も創作も両方とも、投げやりにして居るから、救われなと思うんだ。どんなに放蕩してもいい。いい物を書いてさえ呉れば、僕達はグウの音も出さないんだ。」と、雄吉は細木に云つたことがある。

河野の生活が、だんだんその調子を狂わしてからは、雄吉たちとの交際も、だんだん疎遠になつてきた。夕方^{タタ}の五時から、どんな所用があつて、尋ねて行つても、在宅して居ることは、殆どなかった。

「河野の所へは、何時行つても居ない。」と、雄吉たちは口々に云い合つた。家に居ないことまでが、何も河野に、道德的責任がある訳でもないのだが、幾度も重つて居る中には、そう云う事からしても、妙な感情上のコジレが出来かけて居た。

其中に、河野は雄吉などの連中とは、全く違つた遊び友達を、作つて居た。

「君達は、酒が飲めないから、駄目だよ。僕にはやっぱり、飲み友達と云つたようなものが必要だよ。」と、河野はよくそれを弁護した。又、人が好くて、我を出さないで、殊に酔うと、益々無邪気になる河野は、誰にでも友達として、直ぐ受け容れられて行くのであつた。

「あの連中との交際は、第二義第三義の交際だよ。君達がやっぱり第一義だよ。」と、河野はそんな事を云つた事もある。が、然しそれは云うものの、河野がだんだん今迄の友達と放れ、新しい——同時に交際の興味も新しい——友達に、親しかけて居るのは事実だった。相対する高台と高台とに、住んで居ながら、河野は雄吉を尋ねて来ることなどは、殆どなかった。何時行つても不在なので、雄吉の方から、訪問する気も起らなかった。

今年になつてから、仲間中^{うちだ}で、組織して居る会で、雄吉達は久し振に河野に会つた。河野の生活に対する非難が銘々の心の中で、白熱して居た。河野は、入つて来た時から、陰悪な空氣に包まれて居た。細木と藤田とは、つい妙な話の機^{はし}みから、河野に対する平生の非難を、口に出してしまつた。それは、蔭で云つて居る河野の悪口のホンの余沫が出たのに過ぎなかつた。それでも、河野には可^かなりの致命傷であつたらしかつた。雄吉は、蔭では河野の悪口を真先に云つて居る癖に、いざと云う場合になると、一口も云えなかつたことが、恥しかつた。誰に対してもいい子だと思われないと云うような、利己的な心持から、黙つて居たのではないかと、自分で恥しかつた。やっぱり、細木や藤田などの方が、ああした直言をするほど、自分などよりも、河野に対して、熱誠を持つて居るのだ。何も云わないで、黙つて居た自分が、河野に対して、一番冷淡なのではないかと思つた。

(菊池寛「神の如く弱し」による)

問一 太い傍線部分ア、オの漢字の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部1について、雄吉が多くの人々の反対にもかかわらず河野に新聞小説を書かせたのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部2について、なぜ細木などは雄吉を非難の的にしたのか、詳しく説明せよ。

問四 傍線部3について、これは河野のどういう生活を暗示しているか、詳しく説明せよ。

問五 傍線部4について、「恥しかつた」という雄吉のこの時の心情について、詳しく説明せよ。